

## 丹波市と丹波篠山市をつなぐ道 — 田艇吉 —

丹波市と丹波篠山市を航空写真で見ると、市の境が多くの山々で分けへだてられていることがわかる。昔、丹波地域の人々は、いくつかあったとうげ道を通って、行き来していた。その中でも鐘ヶ坂峠は、古くから京都や大阪から丹波地域を経て、但馬、丹後地方にぬける要所であった。しかし、とうげ道は長く、陰しく急な山道だった。

鐘ヶ坂峠を丹波市側から通ると、金山の頂上近くに自然の岩でできた「鬼のかけ橋」という奇観を見ることが出来る。江戸時代の浮世絵師歌川広重は、この地を名所として紹介しているが、この作品からも鐘ヶ坂峠がいかに急峻であったか、うかがい知ることができる。

\* \* \*

一八七九（明治十二）年の暮れ、県会議員になっていた田艇吉は、雪のとうげ道を歩いていた。「危ない！ どけっ、どけっ！」

雪の積もった急な坂をゆっくりすべっていく馬力があつた。坂を上りきれずすべり落ちてきているのだ。艇吉たち通行人はあわてて左右によけた。もう少し勢いがあつたら、よけきれない人もいただろう。

「このとうげでは毎年、冬に限らず多くの人が急で細い道から足をふみ外し谷に落ちて命を落とす：

…。」

丹波地域を結ぶ大変重要な道は、交通の難所だった。

この鐘ヶ坂峠を行き交う人は、時代が明治になってから一気に増加した。馬力もたくさん行き交う、ただでさえ難所のとうげだ。交通量の増加で、危険の度合いはいっそう増していった。

艇吉は、ずっと下へすべっていく馬力を見ながら、考えていた。

「なんとかこのとうげ道を、人も馬力も安全に行き来できるように整備できないものだろうか。こんなに危ない状態のままだったら、さらに多くの人が命を失い、結局このとうげは世の中から見捨てられてしまうにちがいない。氷上も多紀も時代から取り残されてしまうのではないか。」

「これは、なんとかせなあかん……。」

艇吉は、そう思った。

一八八〇（明治十三）年の正月、艇吉は有志数名の寄り合いで氷上と多紀の将来について語った。道路改修の話から話題が鐘ヶ坂峠におよんだ。その時、艇吉は思い切って自分の考えを述べた。すると、参加した者からはずい道ほろうという意見が出され、

「なんとかしよう。」

とみんなの考えがいつちした。一日でも早くと艇吉の胸はおどった。

その日から、協力者を増やす活動が始まった。

しかし、活動を始めた矢先のある寄り合いでは、

「あかん、あかん。あのとうげはどうにもならへんて。」

真っ先に否定的な意見がとんできた。危険なのは承知だが、そういうとうげなのだと、だれもが思っていた。艇吉のように、とうげを整備しようなどという発想は、まったくなかった。

「気をつけて通れば事故は防げるやろ。」

「そんな何べんも通るとうげやないさかいな……。」「

艇吉は参加者の関心のなさにいきどおりながらも、それをこらえて語った。

「これからは、わしら村の者同士だけが行き交うことを考えとったらあかん。よその者もこのとうげを通るようになる。新しい物や技術が、このとうげをこえてわしらのところへやって来るんや。ずい道を通せば、安心してとうげを通ることができるようになる。そうなれば、多くの人が利用して、わしらの村も栄えるやろ。」

参加者は艇吉の話をだまって聞いていたが、一人が思りよ深げに言った。

「あんたの言うことはわかる。立派な考えや。でもな、金はどうすんのや？　ずい道を通すとなると、いったい、どれだけの金がかかると思うとんのや？」

この反論に、さすがの艇吉もちんもくした。なんと言っても難所の整備である。どれだけの費用がかかるのか見当もつかなかった。もちろん、その費用を集める当てもなかった。

「艇吉はん、しょうがないやんか。荷物を少のうして、まずは気をつけて行けば安全やろ。」

費用の話になって、場のふん囲気が一気に冷めていった。

艇吉も、その場はだまるしかなかった。

それでも艇吉は、自分たちがこのとうげ道をなんとかしないことには、子や孫の世代に申し訳が立たないように思えてならないのである。雪の日にすべり落ちていった馬力の光景が目にかぶ。このとうげの危険性と不便さをなんとかしなければという思いがいつそう強くなる。

このままでは新しい時代に、とうげだけでなく二つの村も世の中の発展から取り残されていってしまうのではないか、この地域がどんどんすたれていってしまうのではないか、そんな危機感をぬぐい去ることができなかったのである。

あの寄り合いから、ことあるごとに艇吉は、とうげの整備の必要性を村の人たちにうったえた。

「艇吉はんは、とうげの話かしよらへん。」

と、村で評判になるほどである。

そんなある日、村の世話役が艇吉を訪ねてきた。

「あんたはとうげの整備を熱心に提案しておるが、あの道がようになって喜ぶのは運送の仕事をしとる者だけやないんか？」

世話役は探るように艇吉の目を見て言った。

「ははあ、そういうことだったんか……。」

この時、艇吉は村の人たちの誤解のありかをようやく理解した。

自分が運送業者のかたをもっていると思われていたのだ。

艇吉は、自分が考えていること、思っていることのすべてを世話役に話した。

聞き終わった世話役はこう言った。

「ほな艇吉はん、荷物を運ぶ者だけじゃのうて、村にも、わしらの子や孫にも役立つことなんやな？」  
「そうや。あそこを通るたくさんの人が難じゅうするのを見とると、これはあかんと思うんや。そりや、運送を商売にしとる者も、楽になるかもしれん。そやけど、それはそれや。だれもが安全に楽にこせるようなうげに、わしらの代で、なんとかせなあかんと思うんや。」

だまって艇吉の話を聞いていた世話役は、

「わかった。」

と、ポンとひざをたたいて出て行つた。

その日を境に、村人の態度は一変した。

「馬力だけのためじゃないらしいわ。」

「これからの時代に備えなあかんというこっちゃ。」

艇吉の考えがしだいに理解されてきた。

それからというもの、村の寄り合いが開かれるたびに、集まって来る村人の数はどんどん増えていった。

「問題は金やな。寄付をつのつたらどうや。わしが一番目になつたる。」  
と資金について語る者がいる。

「ずい道だけでなく、周辺の道路も改修すれば、みんなが喜ぶはずや。」  
と、とうげの整備から計画を広げる考えへと発展した。

艇吉は、丹波地域の未来のために語り合うみなを、大きくうなずきながら見つめた。

\* \* \*

その後、計画は進み、多方面への要せいも実り、ばく大な資金は国と県に補助してもらうことになった。必要な資金の半分近くは、丹波地域をつなぐ道に期待を寄せた地元の人たちからの寄付によるものだった。

ずい道の工事は一八八〇（明治十三）年十二月に着工した。レンガ積み工法のトンネルで、これは日本最初の試みだった。使用したレンガは三十八万枚といわれる。

一八八三（明治十六）年、鐘ヶ坂峠ずい道しゅん工。十月十三日に、盛大な開通式が行われた。

式典に出席した艇吉に、さまざまな人が祝いを言いにくた。

しかし艇吉は、「それは筋がちがう」と思った。

「わしは、村に必要なと考えて言い出しただけや。あとはみんなの力で、こしらえたんや。」  
そう思いながらも艇吉は、次の世代に残す仕事を一つやりとげたことに、満足していた。

艇吉は笑顔でずい道の入り口を見つめていた。しかしその表情は、まだまだ整備すべき交通もうの課題に思いをめぐらせているようでもあった。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。